ANNUAL REPORT 2017

神戸大学大学院
農学研究科地域連携センター
平成29年度 活動レポート

Center for Regional Partnership
Graduate School of Agricultural Science
Kobe University

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1（A103号室）
Tel 078-803-5939　E-mail ans-chiiki@edu.kobe-u.ac.jp　オフィスアワー 火・水・金 13:00〜16:00

地域連携センターの役割

グローバル化がすすむ一方で、超高齢社会をむかえ、地域はさまざまな問題を抱えています。「地方消滅」の危機に対して、「地方創生」がとなえられ、大学には、地域の「知の拠点」としての役割を果たすことが求められています。

農学研究科地域連携センターは、地域と大学をつなぐ連結点（ハブ）となり、課題解決や価値創造を図ることを目的として設立されました。その使命は、1）農学研究科が有するあらゆる知をもって、地域の課題解決に貢献すること、2）大学生および地域の人々に、現場での経験に根ざした学習の場を提供すること、そしてその交流の上で、3）新しい知を創造し、世界と日本の地域の内発的な発展に寄与することです。

地域連携センターは、地域の多様なニーズや課題を、農学研究科・農学部の教員や学生につなげ、共同研究や実践活動として展開させることをサポートする中間支援組織としての機能を果たし続けていきたいと思っています。

ごあいさつ

農学研究科地域連携センターは、神戸大学が教育研究と共に、社会に貢献するために、「地域のシンクタンク機能」「地域で働く人材育成機能」「相談・情報発信機能」等を目的に平成15（2003）年に設置されました。そして平成18（2006）年には、農学研究科と篠山市とで地域連携計画書を作成するとともに、「篠山フィールドステーション」を開設し、今日に至っております。

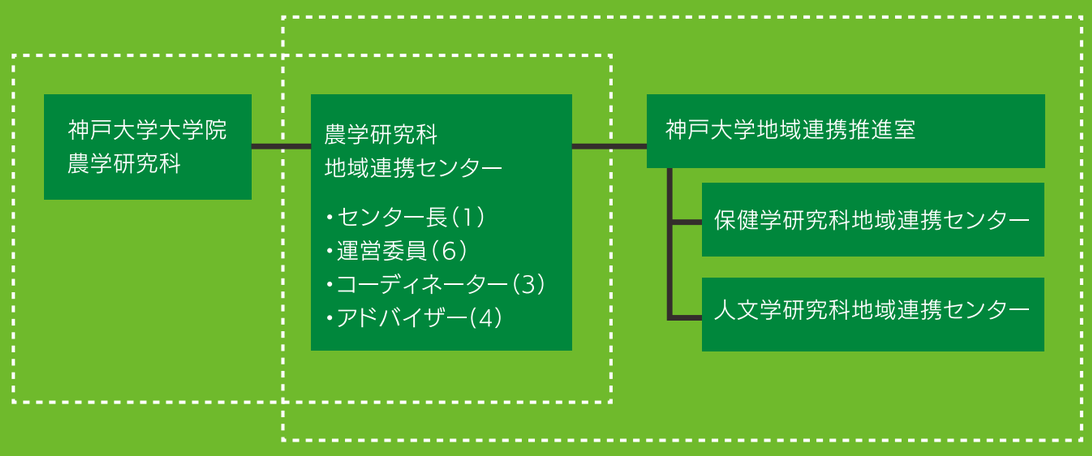
当センターは、これらの機能を果たすために、主に次の3つの活動を実施しています。まずは、「地域共同研究」です。地域が直面している問題を解決し、地域がより発展するための調査研究を自治体などと共同で進めています。2つ目は、「地域交流活動」です。フォーラムや学習会などの開催を通じて相互理解するとともに、知識を共有し地域の発展につながる活動をしています。また、地域交流を通した実践型の学生教育にも取り組んでいます（平成23年4月には、これまでの成果をまとめた『農村で学ぶはじめの一歩』［昭和堂］を出版しました）。さらに今年度には、篠山口駅に「神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ」を新たに開設し、起業促進プログラム「篠山イノベーターズスクール」（篠山市主催）をスタートしました。3つ目は、「相談・情報発信活動」です。共同研究や地域の問題の相談に応えるなど、研究や活動における事務局業務をするとともに、ホームページなどを通して最新の情報を発信しています。

この『活動レポート』は、平成29年度に当センターが実施した活動を取りまとめたものです。我々の活動の理解を深めていただく一助となるとともに、地域の発展に役立てば幸いです。

星 信彦

組織体制

地域連携センターは農学研究科及び神戸大学地域連携推進室のもとでセンター長を中心に運営委員が管理運営に関する事項を審議し、常勤および非常勤の地域連携コーディネーターが、農学研究科教職員や各種地域団体との連携を図りながら事業を推進しています。また、学内外の幅広い知見や情報、それに基づく助言を得るためアドバイザーを置いています。



【平成29年度スタッフ】

センター長	星　信彦（応用動物学 教授）
運営委員	松本文子（生産環境工学 助教）　中塚雅也（食料環境経済学 准教授） 横山俊史（応用動物学 助教）　黒田慶子（応用植物学 教授） 藍原祥子（応用生命化学 助教）　鈴木武志（農環境生物学 助教）
地域連携コーディネーター	木原弘恵（特命講師）　豊嶋尚子（学術研究員） 山野ゆかり（事務補佐員）
アドバイザー	加古敏之（神戸大学 名誉教授）　伊藤一幸（神戸大学 元教授） 高田　理（神戸大学 名誉教授）　内平隆之（兵庫県立大学 教授）

1 地域共同研究

地域の課題解決や価値創造のため、自治体、住民団体、NPO、協同組合等と連携して調査研究を行っています。
ここでは、センター研究員が中心となる研究と、地域連携センターがコーディネートする主な研究を紹介します。

連携先　養父市
（一社）田舎暮らし倶楽部

移住・定住促進と農業の多角化推進の相補関係

衛藤彬史（学術研究員）

職と住の一体的な支援を担う地域活動団体を事例に、6次産業化推進と移住・定住促進に一体的に取組むことで相乗的な効果がうまれる可能性について、聞き取り調査と参与観察に基づき考察した。

連携先　京都府京丹後市
NPO法人 気張る！ふるさと丹後町

ICTを活用した新たな公共交通システムの実装

衛藤彬史（学術研究員）

ICTを活用した地域独自の交通サービスを構築し、山間部において交通空白地問題を軽減している取組みを事例に、新たな交通サービスを地域社会に実装する上での方策について考察した。

連携先　篠山市ほか

地域固有性の発現と農村発展モデルの確立

中塚雅也（農業農村経営学）

地域資源の「固有性」の本質を理論的に整理するともに、丹波・丹後地域を中心とした事例分析により、その地域固有性の見いだし、育てて、農村・農村の発展に繋げるためのフレームワークを提示した。

連携先　真南条営農組合（篠山市）

新しい株間除草機構を用いた水田での実験

庄司浩一（生物生産機械工学）

水田での機械除草で難しいとされる、株間（田植機進行方向の株のすきま）の除草強度を簡単に調節できる機構を開発し、除草剤を施用しない水田にて実証することにより、環境保全型農業の拡大に貢献する。

連携先　笠岡市白石島公民館（岡山県）

地域資源の管理・利用とコミュニティ再編に関する研究

木原弘恵（特命講師）

本研究は、瀬戸内海の島嶼部において、その土地の資源が、価値あるものとして再評価されるプロセスやその利用の展開を調査し、それとともに生じる地域内外の関係性の変容について検討した。

連携先　真南条営農組合（篠山市）

新しい特産品づくりに関する研究“香りヤマナシ”栽培の可能性

片山寛則（食資源教育研究センター）

遺伝的多様性の観点から、遺伝資源としてのヤマナシを保存するだけでなく利用しながらの保全を目指す中で、その一部を篠山市真南条上集落に移植し、6次産業化に向け準備を進めている。

連携先　篠山市

駆除した侵略的外来生物の活用方法の研究

鈴木武志（土壌学）

アカミミガメをはじめ、アメリカザリガニ、ブラックバス、ブルーギル等が篠山城跡堀で駆除されており、生態系への影響が問題視される中、駆除したこれら外来生物の有機肥料としての活用を目指している。

連携先　篠山市

人工衛星画像解析を用いた兵庫県内の圃場毎営農状況の自動判別法の開発

長野宇規（地域共生計画学）

無料公開されている衛星情報と水土里情報システムなどの農地GIS情報を組み合わせることで、圃場1筆毎の土地利用を判別する研究を、篠山市の圃場を対象に引き続き実施した。

連携先　兵庫県東播磨県民局ほか

東播磨地域におけるため池管理の課題と方向性

中塚雅也（農業農村経営学）

農家の減少と高齢化、混住化など地域環境が急激に変化する中、新たなため池管理システムを提示、実装することを目的とする。その初期モデル（プロトタイプ）創出のための拠点を大学間連携により設置する。

連携先　南あわじ市ほか

淡路島におけるたまねぎ農業システムの評価

中塚雅也（農業農村経営学）

淡路島三原平野のたまねぎを中心とした農業について、生産、歴史、ランドスケープなどの多角的な視点から評価分析し、水稲、たまねぎ、牧畜が複合循環的である農業システムの特徴を明らかにした。

連携先　吉良有機農園（篠山市）

中山間地域農業の資本生産性

衛藤彬史（学術研究員）

先進的な出荷・販売方法により小さい面積でも高い収益性を実現する吉良有機農園を事例に、条件不利な中山間地域でも成り立つ経営モデルを示す中で、中山間地域農業が資本生産性の点で優位となる可能性を検討する。

連携先　西紀北地区（篠山市）

複数集落の連携による地域資源管理

衛藤彬史（学術研究員）

地域行事として夏祭りの運営を複数の集落間で連携して開催する事例を対象に、連携に至った経緯や実態を明らかにした上で、集落間連携の促進に向けた課題と方策の提示を目指す。

連携先　取組み主体：神戸大学
神戸市建設局防災部神戸市北区下唐櫃地区
連携先：篠山市

里山の植生回復に効果的な資源利用の検討と試行

黒田慶子（森林資源学）

神戸市北区では放置里山の植生調査を経て、次年度5月には神戸市と共同でモニターツアーの開催を予定している。また、篠山市では、猟師と連携し捕獲されたシカの解体および食肉利用の推進に取組んだ。

2 地域交流活動

フォーラム、研究会、セミナーの開催

フォーラムや研究会、セミナー等の開催を通じて相互理解を目指すとともに、知識を共有し地域の発展につながるような取り組みを実施しています。また、地域での実践活動ならびに農学の先端研究・理論に気軽に触れる場として、地域連携研究会（A-launch）というトークイベントを行なっており、毎回、学生らにも好評を得ています。

【実施の概要】

1. 地域連携研究会（A-launch）
7月25日
「動物系の研究者が良く間違える統計」
話題提供：横山俊史（動物分子形態学）

2.地域連携セミナー
7月27日
"Perspective on Agricultural Policy in the UK"
進行：中塚雅也（農業農村経営学）

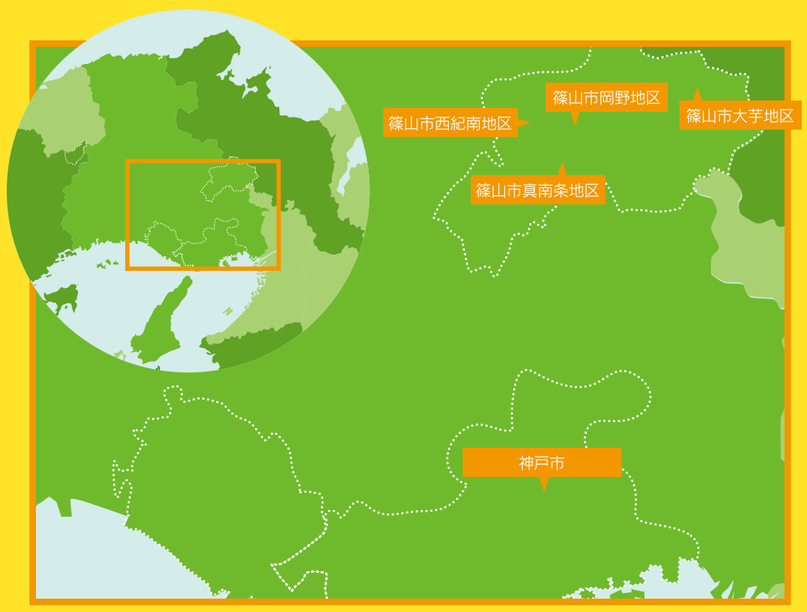
農村ボランティア「ノラバ」事業

本センターでは、農村ボランティアバンクKOBE「ノラバ」の事務局として、ボランティアを要する農家と大学生・市民のマッチングをおこなっています（全登録者数640名）。本年度のマッチング数は16件でした。

学生地域活動サポート

本センターでは、地域と連携した取り組みを進める学生団体に対して、情報提供、情報発信の補助、相談対応など、その活動が取り組みの充実と発展に向けた支援を行っています。本年度は、6つの団体（ささやまファン倶楽部、にしき恋、サンセット12、AGLOC、おくものがたり、ぶさべじ～ぶさいく・べじたぶる～）の活動を支援してきました。さらに、農林水産省主催の「食と農林漁業大学生アワード」への参加とプレゼンテーションに関する支援もおこないました（にしき恋、AGLOCがファイナリストとして選出されました）。また、篠山市で活動をおこなう団体らは「篠山学生活動団体連絡協議会」を組織し、それぞれの活動計画や課題などを共有しています。

また、2013年度より、活動地域で生産した農作物を、学生団体が販売する直売所「ささやま家（や）」を主催し、学内の教職員や学生等に、各団体の活動を発信し幅広く認知してもらえるよう努めています。本年度は年間計4回実施しました。この場は、活動の発信を行う場として機能するだけではなく、農作物の生産に携わった学生が、生産から販売までの過程を経験できる貴重な教育機会となっています。



地域農産物販売による地域PR
にしき恋
神戸大学内や新大阪など都市部のマルシェにおいて、活動地域である篠山市西紀南地区の特産品の丹波篠山黒枝豆や黒大豆を販売しています。どのように販売すればよりよい地域PRとなるか考えながら取り組みました。

世界に向けた地域の魅力発信
AGLOC
地域の魅力を世界に発信するため、多言語による動画作成や特産品開発に取り組みました。タイ語と日本語の両方でつくった作品で、「丹波篠山ビデオ大賞」にエントリーし、「ささやま新発見賞」を受賞しました。

イベント実施による地域活性化
にしき恋
篠山市西紀南地区において、小中学生との交流会、地域の方々との懇親会や活動報告会など、交流イベントを開催することで、にしき恋の活動を知ってもらうとともに、若い力で地域に活気をもたらすよう取り組みました。

留学生と農村地域の交流促進
AGLOC
神戸大学の留学生に、日本の農業や農村の魅力を発見してもらおうと、篠山市岡野地区で農業ボランティアの機会を設けるとともに、篠山をガイドする"Welcome Camp"を実施しました。活動開始から2年間で、計22カ国81人の留学生を受け入れました。

地域の拠点活用策の提案
おくものがたり
現在、篠山市大芋地区では、閉校した小学校の利活用策を検討しています。おくものがたりは、そこで企画されるイベントのお手伝いや、住民と大学生の交流を促すイベント等に取り組みながら、利活用アイデアを考えています。

「食と農林漁業大学生アワード2017」への参加
AGLOC　にしき恋
農林水産省主催の食や農林漁業に関わる取組みを行う大学生グループの活動発表コンテストに、篠山市で活動を行うにしき恋とAGLOCがファイナリストとして選出されました。日頃の活動内容やその成果について発表しました。

「赤じゃが」の販売促進
赤プロ
赤プロは、篠山市真南条地区の「赤じゃが」を使った製品の販売を応援するプロジェクトです。赤じゃがをより広く知ってもらうために、地域の方々は加工製品を試作しています。そのデザインや販売戦略を検討しました。

「にさんがろくPROJECT」への参加
ぶさべじ
神戸産農水産物を素材に、新たなものづくりとネットワークづくりを目指す、神戸市主催のプロジェクトに参加しました。高嶋酒類食品やチアファームの方々と、海外からの観光客に向けた商品開発に取り組み、特別賞を受賞しました。

3 相談・情報発信

ホームページ等による情報発信

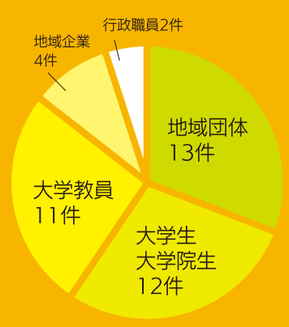
大学と地域をつなぐ拠点として、日々、所属するスタッフが相談に応じたり、情報発信を行ったりしています。

2017年度（1月～12月）は42件の相談が寄せられました。相談内容は、学生の地域活動やイベント等、広報協力依頼の相談が若干多めではありますが、その内容は多岐にわたっています。また、地域活動に関する情報を、ウェブページやSNS を通じて随時発信しています。

オフィスアワーの実施

地域と農学研究科をつなぐ窓口として、情報の受発信を行い、各種相談に応じています。具体的なレベルの相談は、本年度は42件（企業4件、地域団体13件、行政2件、大学生・大学院生12件、大学教員11件）でした。

相談内容としては、事業や施策に関するアドバイス依頼、連携センターとの協働事業の立ち上げ、農学部への共同研究、学生地域活動についての相談、イベント告知への協力などでした。



オープンキャンパスでの展示

2017年8月に実施された神戸大学農学部のオープンキャンパスにおいて、食農コープ教育プログラムのカリキュラムや授業の様子などをパネル紹介しました。そのほか、食農コープ教育の授業を通じて結成された学生活動団体の活動についても学生らが自ら紹介しました。

4 食農コープ教育プログラムの推進

神戸大学農学部では、食や農の現場において課題解決に貢献できる人材の育成を目指し「食農コープ教育プログラム」に取り組んでいます。
本センターはこのプログラムの事務局として、協力教員とともに、次の3つの科目の企画実施をおこなっています。

実践農学入門

兵庫県篠山市において、農家の指導のもと、農作物の栽培や様々なむら仕事を体験しながら、農業や農村生活の理解を深めることを目的としています。本年度は、西紀中地区里づくり振興会を受け入れ先として、42名の学生が12戸の農家に分かれて黒大豆栽培を中心とした作業や体験をおこないました。

実践農学

農業農村の現場での調査やプロジェクトへの参加（インターン）を通して、地域の産業・環境・社会を理解する基礎的な技術や能力、および企画立案や調整の能力を身に付けることを目的としています。本年度は、計28名の履修者がありました。森林を対象とした調査型プロジェクトである「森づくり班」は神戸市や篠山市にて活動を行い、インターンシップ型プロジェクトは、篠山市大芋地区、篠山市地域おこし協力隊、後川上の西生産組合女性部、JA 丹波ささやま、におけるプロジェクトに参加して活動を行いました。

兵庫県農業環境論A/B

兵庫県の農林水産業の施策や事業の実務を担う兵庫県職員の方々から、兵庫県の農林水産業の現状と課題や政策展開について学習しました（A）。その上で、県民の「農」への関わりを深める、兵庫県認証食品の取り取扱量を向上させる、といったテーマ毎に、具体的な政策を提案しました（B）。